

# 謎の独立国家ソマリランド

ノンフィクション作家 高野秀行



「ソマリランド」なる謎の国があるという情報を得たのは2008年だった。吉田一郎氏の『国マニア』という本に載っていたのだ。それによれば、20年近くも無政府状態が続き数多の武装勢力が割拠し、戦国時代を呈するソマリアにあって、北部地域だけが独自に内戦を終結させ、武装解除に成功した。さらに「ソマリランド共和国」という新しい国の独立宣言を行い、10年以上和平を維持しているばかりか、複数政党制による民主主義国家に移行しているという。信じられない話だ。

国家としての体裁は保っているが一部はぐちゃぐちゃという国はアフガニスタンやコンゴなどいくつもあるが、その逆は聞いたことがない。しかもそのソマリ

ランドは国際社会から全く承認されていないという。インターネットで調べると、たしかに存在するようだが、「一部の武装勢力が国のふりをしているだけ」とか、いわば現在の「イスラム国」みたいな扱いをしている記事もあり、何が本当なのかわからない。もしソマリランドが実在するとしても、どうしてそこだけ和平や武装解除や民主化が可能だったのかわからない。「内戦を独自に解決」というだけでもすごい。第二次大戦後、無数の内戦が世界で行われているが、当事者だけで解決されたケースなど皆無だろう。そんなことが果たしてありえるのか。要するに、全てが謎に包まれている。

早稲田大学探検部に所属していたとき

以来、「謎」や「未知」が三度の飯より好きな私が、そそられないはずがない。謎のソマリランドを目指してソマリアに向かったのは2009年のことだった。隣国エチオピアのアジスアベバにソマリランド連絡事務所という大使館代わりのものを見つけ、そこでビザを取得。バスや車を乗り継ぎ、3日かけてソマリランドの首都ハルゲイサに到着した。

ソマリランドは実在した。ハルゲイサは人口百万にも達する都会で、町は活気にあふれていた。治安はともよく、夜遅くに私のような外国人が歩いていても何も問題ない。夜8時過ぎ、10代の若い女の子たちが連れだって、携帯ゲームをやりながら中心街をそぞろ歩いていた。治安がよいといっても、警察や軍隊が



厳重に警備しているわけではない。というより、警官も兵士もまるで見当たらない。いるのは、銃をもたない交通整理のおまわりさんくらいだ。

この治安の良さは一体どこから来るのか？

通訳として雇ったワイヤップという人が現地の辣腕ジャーナリストであり、彼や彼の友人たちの説明で徐々にその謎が解けていった。

それはソマリ人独特の「氏族社会」によるものだった。

ソマリ人の多くは遊牧民である。彼らは常に移動しているので、「住所」を持たない。その代わりになるものが「氏族」だ。氏族は分家、分分家、分分分

家……とまさに住所のように細分化されている。初めて会った人たちは氏族を名乗り合うことによって、互いの身元を確認する。これは遊牧民にとってひじょうに大事なことだという。

例えば、半砂漠のようなこの地では雨が降らないとすぐ干ばつになる。農耕民と異なり、遊牧民の彼らは雨が降るのをじっと待ってられない。家畜が死んでしまふからだ。水場と牧草地を求めて、彼らは果断に移動する。その過程で誰か他の遊牧民に出会い、「この辺に水場はないか」と訊ねたとする。このとき、相手は仮に水場を相手に教えなくなかったとしても嘘はつけない。なぜなら、氏族名を名乗り合うことによって、相手が誰かわかってしまい、あとで大問題になるからだ。

犯罪者も同様に、氏族の網でたやすく居場所がわかってしまう。氏族は自分のメンバーが何か問題を起したら責任をもって対応しなければメンツを失ってしまう。そしてメンバーは氏族の言うことを聞かない場合、その氏族から追放されてしまう。氏族から追放されるということでは、所屬先がないということでもあり、ソマリ社会から抹殺されること

にもなる。

だから、ソマリ人の世界は氏族間抗争さえなければ、ひじょうに治安がよく、秩序が保たれる構造になっている。

問題は、その氏族間抗争だ。これは昔から現在に至るまで、ひじょうに頻繁に起きている。前述した干ばつの場合でも、水場や草地を求めて複数の氏族が取り合いを行うケースはしょっちゅう生じる。どちらかが相手を殺すと、やられた側は必ずやり返す。しかも氏族の成人男子はすべて氏族の戦いに参加する義務があるので、すぐに本格的な氏族抗争となる。

ここで面白いのは、ソマリ人はすぐ抗争を起こすが、抗争になれているがゆえに、「和解」にもなれているということだ。被害者が増え、抗争の規模が大きくなりすぎると、中立な第三者（多くは近隣の別の氏族）が仲介し、和平交渉が行われる。

和解の方法も決まっている。加害者が被害者の遺族に賠償金を払うのである。被害者が男性ならラクダ100頭、女性なら50頭と賠償額まで決められている。ソマリランドの田舎では今でもラクダで賠償が行われ、都市部では——さすがにラクダがないので——現金で支払われ

る。この場合、「ラクダ1頭あたり2百数十ドル」と相場ができている。相場は物価によって変動するという。

もちろん、加害者個人が払うのではない。氏族が払うのだ。この場合の氏族は、日本で言う「町内会」レベルだ。メンバー12千〜3千人ほど、ただし、男子しかメンバーとして数えない。

メンバー1人当たりが5ドルずつなど出し合って、賠償金を払うわけだ。

この賠償システムは抗争だけでなく、人が誰かの責任で死ぬ全ての場合に適用される。例えば、通常の殺人、傷害致死、さらに交通事故だとか従業員が職場で事故死したなどなど。抗争以外の死亡事件（事故）の場合、ソマリのシステムはひじょうに被害者中心にできている。もし被害者が強く望むなら、——特に悪質で意図的な殺人の場合——遺族は自分の手で加害者を処刑することができる。だが、多くの場合、遺族は賠償金を選択するという。



ソマリランド長老院の前で会った長老代表のみなさん

1度、通訳のワイヤツプに「日本は殺人が行われたとき、被害者にはどう補償するのか？」と訊かれたことがある。「日本では加害者は刑務所で服役するか死刑になるだけだ」と答えたら、「それだけか？ 遺族はどうなるんだ？ もし働き手が死んでしまったら生活に困るだろう？」と眉をひそめられた。

そうなのである。日本人は「正義」を振りかざすことには熱心でも、誰も本気に遺族のことなど考えない。「遺族感情」に誰も配慮しない。ソマリ人の方がよほど「人道的」である。

話を氏族間抗争に戻そう。互いに数人、もしくは十数人という犠牲者が出たとする。そのとき、面白いのは「どちらが悪いか」ということを問題としないことだ。「あっちが先に侮辱することをした」「あっちが先にこったのヤギを殺した」などと言い合っても埒があかないことを彼らは経験的に熟知しているので、純粹に犠牲者の数を数えるという。そして、ラクダ百頭をそれぞ

れの遺族に支払うのである。この賠償支払いをソマリ語で「ヘサーブ（精算）」という。ソマリ人がいかに合理主義的かわかるだろう。

このヘサーブもそうだが、総じてこれはソマリの「掟」として、少なくともソマリランドではよく守られている。

掟にはいろいろあるが、大切なのはこの賠償法と次の「ビリ・マ・ゲイド（殺してはいけない者）」が挙げられる。後者は、戦争のとき、女性、子ども、老人、傷病者、宗教指導者、コミュニティのリーダー、捕虜、和平の使節、たまたまその場に居合わせたゲストを殺してはいけない——、つまり「非戦闘員に危害を加えること」を禁止した、まさにジュネーブ諸条約に匹敵する掟なのである。

そして、賠償法とソマリ式ジュネーブ諸条約こそが、ソマリランドの和平の秘密なのだ。

1991年、旧ソマリアの独裁政権が倒れたあと、ソマリアは全土がすさまじい内戦と化した。旧ソマリアの北部に位置するソマリランドでも2回の大きな内戦で数千単位の人が死亡した。だが、ある程度内戦が拡大すると、「和解」の動きが始まった。隣合った小さな氏族ごと

に、話し合いをもち、賠償金を払って「精算」をするようになった。ソマリ人社会は完全にボトムアップ、あるいは「草の根」であり、日本で言う「村」単位で交渉と和解が始まり、それがやがて「町」↓「市」↓「都道府県」レベルへとあがっていく。

だが、今回の内戦の場合、あまりに規模が大きく、通常の賠償方法では解決しきれなかった。なぜなら、激しい戦闘の最中にどの氏族の兵隊がどの氏族の人間を殺したか全て突き止めることなど不可能だったからだ。

そこで氏族の代表らが集まり、数か月にも及ぶ話し合いを何度も行った結果、「加害者が不明な場合、賠償はなしとする」という結論をえた。

これは一見、伝統的な掟を無視した方法に見えた。私がそう指摘すると、長老の1人は「ちがう。おまえは何もわかってない」と答えた。彼に困れば、ソマリの掟では何か問題が起きた場合、「前例があるか、ないか」をまず確かめる。前例があればそれに従い、なければ、一から話し合って「新しい解決策」を見つける。それが次回からの「前例」となる。つまり、今回の内戦は「前例がない」と見なされ、「新しい解決策」が求めら

れたわけで、「ソマリの掟通り」なのだ。まるで、日本の裁判所のようなのである。

ソマリ人は性格的には好戦的でじょうに粗っぽいが、半面、やることはすべて合理的でロジカルなのが特徴である。

ここで気になるのは、なぜ南部ソマリアでは内戦がエンドレスに続いているのかというところだ。

理由はいろいろあるが、最大の理由は、ソマリランドと南部ソマリアは植民地時代、宗主国が違ったことが挙げられる。ソマリランドはイギリス領であり、イギリスは間接統治を行うため、伝

統的な氏族社会は壊されずに残った。かたや南部ソマリアはイタリア領で直接統治。しかもイタリア人が1万人も移民してきた。氏族社会の

肝心な部分、例えば長老の役割や賠償法、「殺してはいけない者」などが壊されたり、忘れられたりした。



オアシスの町で水をがぶ飲みするラクダ

しかも南部ソマリアはもともと土地が豊かで、農業が発達していたため、遊牧民気質が薄い。あまり抗争も起こさない。

ソマリランド人は言う。「俺たちは戦争をよくやるから、止め方も知っている。南部の連中は戦争に慣れてないから、終わらせ方もよく知らない」

ソマリの掟も半分忘れ、戦争の作法を知らない南部ソマリ人は、いったん内戦が始まると歯止めが全くなりなくなってしまった。

ソマリランドでは内戦中も、女子どもはほとんど被害に遭っていないという。レイプもない。だからこそ、話し合いで精算という得意パターンに持ち込むこともできた。

ところが南部ソマリアでは、女子どもが多数虐殺された。やはり妻や子どもを殺されたら、男は絶対に相手を許せない。当たり前だろう。

南部ソマリアでは長老の立場も確定されておらず、賠償法は一応あっても、「ラクダ百頭」と決められていないという。植民地時代に中途半端に氏族社会が壊された結果、氏族ごとに結

束して戦闘はできても、氏族間の和解を行うほどシステムが継承されていないのだ。

ソマリアといえば、内戦以上に有名なものが「海賊」である。日本の自衛隊も海賊対策のためソマリランドの隣にあるジブチに派遣されている。

この海賊も実は氏族社会の伝統に従っている。海賊行為を行っているのは9割方、「プントランド」という地域に住む氏族だ。彼らもまたソマリランドと同様、氏族の掟を忠実に守って暮らしている。彼らも内戦後、わりと早い段階で氏族間抗争を終わらせた。だが、そこから独自の国作りを行ったソマリランドとは対照的に、ソマリア政府内に留まったまま、「独自政府」を形成した。そして、そこに住む氏族は海賊行為に精を出すことになった。

ソマリアの海賊はひじょうにシステムティックなことで知られる。通行する外国船を見つけると武装した民兵たちが素速く乗っ取り、船を自分たちの領土に持って帰り、人質を確保して、船の持ち主と身代金の交渉を行う。身代金が支払われたら、人質は速やかに解放する。そして人質には決して危害を加えない。

これはまさにソマリの伝統なのだ。ソマリ人は敵対する氏族の人間を見つけて拉致するということを昔からよく行っている。今でも珍しくない。その際、拉致された人間は「捕虜」となり、「殺してはいけない者」の1つなので、危害は加えない。むしろ大切に扱う。そして、相手の氏族と交渉し、身代金としてラクダ10頭なり20頭なりをもらうと、人質を解放する。

ようするに従来、陸の上でやっていたことを海の上でやるようになったのが海賊なのである。だから、一見「無知な田舎の漁民」がこれほど洗練された海賊行為を遂行できるわけだ。

陸の場合、下手に拉致すると、相手の氏族が復讐してくる可能性が高い。だからそう簡単に拉致などできないが、海賊の場合、外国船を襲っても復讐される恐れがない。プントランド内の誰にも迷惑がかからないうえ、みんなが潤うので（身代金は氏族のメンバー全員に行き渡る）、多くの人が「氏族の抗争などやめて海賊に専念してほしい」と思っていたようである。

海賊は1年ほど前から急に下火になった。それは国際法が変わり、民間の船舶にも武装したセキュリティガードを乗船

させることができるようになったからだ。大きな船の上から逆襲されたら、海賊側は著しく不利だ。ソマリ人は日本人よりずっと合理的なので、リスクが高ければ決して無理はしない。陸上で他の人間を拉致したほうが得かもしれない。

このような理由で、ソマリアの海賊問題はもう解決されたも同然である。自衛隊は早く引き上げた方がいいだろう。

私はソマリランドを訪れたあと、海賊が全盛期だったプントランド、さらには戦国時代そのものである南部ソマリアを訪れた。どちらも武装した護衛がいなければ、十分とかわからず拉致されるか殺されるかする場所だった。それだけにソマリランドに戻ったとき、その治安のよさと平和に心底感動してしまった。

ソマリランドは平和なだけではない。民主主義も発達している。その秘密は特殊な二院制にある。ふつう二院制といえば、アメリカの上院・下院、あるいは日本の衆議院・参議院みたいなものを想像するが、ここでは「長老院」と「議会」からなる。長老院は各氏族の代表が集う場であるが、議会は政治家が集まる場である。ソマリランドの人々は氏族の良い面と悪い面を知り尽くしているので、

「政治は非氏族で行わなければならない」と定めた。遊牧民といえども動き回る範囲は限られているので、選挙区を定め、ソマリランド全土の選挙区で一定割合以上の得票をえないと政党として認めないという法律を作ったのだ。

なので政党は氏族単位ではなく、「保守」と「リベラル」のような対立軸となっている。ただし、政治家は自分たちにとって都合のいいことを行う傾向がある。例えば、大統領の権限を著しく強化するとか憲法を拡大解釈するとか。その場合は議会に任せていてもダメなので、長老院が歯止めになる。長老院が「ノー」と言えば、その法案は通らない。

要するに、ソマリランドの二院制は氏族と政治家が互いに監視しあっているのだ。日本の国会についてワイヤップに説明したら、「それじゃ参議院は何のためにあるんだ？ 意味ないだろう」と言われてしまった。

日本でも最近憲法論議が盛んなので、ソマリランド人にとっての「憲法」とは何か説明しておこう。それは一言で言うなら「掟」なのだ。従来の掟ではソマリランド独立は定めることができない。つまり「前例」がないので、新しく「掟」を作ったのだ。全氏族が参加し、長い時

間話し合い、憲法の項目を作り上げていった。「掟」は「契約」と言い換えてもいい。だからこそ、氏族の長老たちは憲法（掟）を守ることを使命とする。

いっぽう、南部ソマリヤでも2年前に新政府が20年ぶりに誕生し、去年、新憲法も作られた。ただし、政府も憲法も、国連が手取り足取り助けて作り上げたものだ。すべてを自分たちの手でまさしく「ハンドメイド」したソマリランドとはあまりに対照的だ。

私はその後もソマリランドと南部ソマリヤに通いつづけている。

南部ソマリヤは今でも危険度が高いが、こちらはこちらでひじょうに面白い。私が初めて訪れたときは、ちょうどイスラム過激派「アル・シャバáb」が首都モガディシヨから撤退した直後だった。それまでは町を2分して暫定政府軍とアル・シャバáb軍が戦闘を行っていた。そして、モガディシヨの町ではもう20年以上、戦闘が絶えないのである。

私はてっきりモガディシヨは地獄のような場所だと思っていた。逃げ遅れた人々がネズミと一緒に廃墟に隠れ住み、国連からの援助物資を頼りに細々と生活しているというような。

それだけに実際行ってみてたまげてしまった。ものすごく栄えているのだ。ソマリランドの首都ハルゲイサなどとは桁違いな繁栄ぶりだ。市場は巨大で、モノがあふれ、道路は日本の中古車（しかも比較的新しい）で渋滞を引き起こしていた。その一方、男たちは誰もがまるで流行りのバッグか何かのように銃を肩から下げ、対戦車砲や機関銃を装備した武装車両が縦横無尽に走り回り、銃声はあらゆる方角から常に聞こえる。

危険と繁栄が共存している。

あるのはモノだけではない。飛行機は国内線・国際線とも普通に飛んでいるし、バス路線も充実している。携帯電話とインターネットは隅々まで普及し、料金も安い。政府がなければ当然各種の規制もないから、純粋に価格競争が行われ、アフリカで最も携帯とネットが安い国となっているという。銀行はないが、代わりに送金会社があり、世界中どこでも瞬時に現金を送ったり受け取ったりすることができ。

ちなみに、武装勢力はアル・シャバábを含めて、誰も携帯会社やネット会社、送金会社を攻撃したりしない。誰にとっても必要なものだからだ。今どき、携帯やネットがなければ、戦争もできな

い。その代わり、それらの会社（あるいはその支社）はその地区を支配する武装勢力に上納金を納める。まあ、税金のようなものである。

町の各地区は氏族ごとに支配もしくは管理されている。入口に検問があり、黙って通過しようとする銃で撃たれる。だが、電気や水道も各氏族の業者が管理しているので、特に問題がない。病院や学校も氏族単位で経営されている。何もかもあるのだ。ないのは政府くらいである。

うーんと私は唸ってしまった。かつて小泉純一郎首相は「官から民へ」と熱弁したが、ここソマリアで行われているのは、その究極の形だ。つまり「完全民営化社会」である。軍も民営化していると考えれば辻褄が合う。「氏族は民なのか」という異論もあるかもしれないが、小泉改革では「民Ⅱ企業」だった。氏族の方が企業よりよほど公益性が高い。

通貨すら民営化されていた。独裁政権時代のソマリア・シリングの紙幣がそのまま使われている。政府もなく中央銀行もないのに（2015年現在は政府も中央銀行も存在するがろくに機能していない）、通貨は普通に流通していた。「通貨とは中央銀行あるいは政府が担保してこ

そ価値を持ち、それがなくなればただの紙切れと化す」というのが経済学の常識だが、その常識が簡単に破られている。

独裁政権が倒れた直後は米ドルや隣国の通貨であるケニヤ・シリングなどが使われたこともあったそうだが、米ドルでは額が大きすぎて細かい日用品の買い物ができないし、外国の通貨はなじみがない。結局、ふだんの生活では昔からみんなが慣れ親しんでいるソマリア・シリングを使いつづけることになった。

それだけではない。政府がなくなつてから、シリングは安定したという。独裁政権時代は政府が公務員の給料を払ったり借金を返したりするため、紙幣を刷りまくったのでインフレ率がすごかったが、政府がなくなると誰も札を刷る者はいない。米ドルやユーロならともかく、ソマリアの紙幣など偽造（政府がない状態で偽装も何もないが）しても経費ばかりかかって全然利益が出ない。かくして、流通する紙幣の量が安定し、シリングの価値も安定してし



ソマリアの首都モガディシヨ。地区によっては戦乱で廃墟と化していた

まった。ケニヤ・シリングよりも安定しているのが、ケニヤからシリングを買いに来るブローカーもいるという。政府はない方がいいのかという話だ。

ありえないことが当たり前に起きていることが南部ソマリアの魅力だ。

もっとも危険度は今でも高い。アル・シャバábは勢力を弱めているが、それに比して、ゲリラ化している。

私は3年前、モガディシヨから百キロほど離れたレーゴという場所まで、政府軍およびアフリカ連合軍の部隊とともに出かけたが、帰りにアル・シャバábの待ち伏せ攻撃に遭った。機関銃と対戦車砲をガンガン撃ってき

て、本当に死ぬかと思つた。私は装甲車に乗っていたから無事だったが（といっても、装甲車が対戦車砲や手榴弾にどれだけ耐えられるのかわからない）、私の目の前でランドクルーザーが対戦車砲をくらって1発で炎上し、運転していた兵士が撃たれて悶絶していた。負傷者だけで死者が出なかったのが不幸中の

幸いだった。

恐ろしい思いをしたものの、ここでも面白い発見があった。

私は国会議員や州知事と同行していたため、彼らがメインターゲットだったのかと思っただが、ソマリ人の友人によれば、「標的はタカノ、君だ」というのだ。なぜなら、外国人である私は政府側にとって「客（ゲスト）」なのだという。ソマリ人は客人をひじょうに大切にす。ソマリ人の掟でも客は「殺してはいけない者」である。

そして、過激派であるアル・シャバーブはあえて「掟」を破ろうとする。敵の客を殺したら、敵は最大の屈辱を得る。だからこそ、標的は客である私だったということだ。

感心してしまった。ソマリ人はときにすごく残酷だったり荒っぽかったりするが、常に論理的に説明ができるのである。

最近私が取材しているのは、ソマリランドにおけるもう1つの紛争解決法だ。それは「加害者の娘を被害者の家族に嫁がせる」というもの。

かなり極端な方法なのでそう簡単には使わないが、両者の憎しみが高まり、ど

うしても収まらないときには今でもときどき採用される。被害者遺族の男と加害者の娘の間に子どもが生まれれば、それは両方の氏族にとって共通の子どもとなる。ソマリ語ではこれを「殺人の血糊を分娩の羊水で洗い流す」と表現する。結婚した2人は賞賛され、生まれた子はまるで有名人のような扱いを受ける。

去年、そういうカップルを直接取材した。内戦中に抗争を行っていた2つの氏族があり、そのとき9歳の男の子が殺された。内戦は終了し、多くの人はこの殺人を放置していたが、男の子の兄弟が成人して「今こそ復讐する」ということになった。なぜなら、子ども殺しは「殺してはいけない者」の掟に反しているから、内戦の和解には含まれないと考えたからだ。掟を破って兄弟を殺されたら復讐しないと面子が保てないのだ。加害者の男は賠償金の支払いを提示したが、兄弟は拒否。断固として「復讐」を主張した。

ここで別の氏族が仲介に入り、加害者の男の娘を殺された男の子の兄と結婚させるという案が採用された。「自分の娘を差し出す」というのは、ひじょうに大きな譲歩あるいは謝罪の意を表すとされている。

こういった話を当の結婚した男性に聞いたのだが、取材自体が異常だった。なにしろ、彼の義理の父親は弟を殺した犯人なのだ。「10数年前、うちの義父が弟を殺して…」などという話になってしまふのだ。

西欧的な人権とは全く別次元の紛争解決法だが、いいか悪いか別として、そういう世界があると知ることが楽しい。

今後、ソマリランドと南部ソマリアがどうなっていくのかさっぱりわからないが、じっくり見守っていきたいと思っている。

(2015年6月25日・公開フォーラム)

#### 講師略歴(たかの ひでゆき)

ノンフィクション作家

1966年東京都生まれ、早稲田大学探検部時代に書いた『幻獣ムベンベを追え』でデビュー、タイ国立チェンマイ大学日本語講師を経て、ノンフィクション作家となる。

主な著書 『ワセダ三畳青春期』で第1回酒飲み書店員大賞(2006年)、『謎の独立国家ソマリランドそして海賊国家プントランドと戦国南部ソマリランド』で第35回講談社ノンフィクション賞(2013年) など